

# 性 逆 転

—— テニソンの *The Princess* ——

---

平 林 美都子

---

Tennyson の *The Princess: A Medley*<sup>(1)</sup> は、Prince と王女 Ida の物語を、ヴィクトリア朝時代の七人のケンブリッジの学生が語り継ぐという、入れ子構造と語りのメドレー形式とからなる叙事詩である。この物語には男性を中心とする家父長制社会とアイダの創設した女性だけの教育の場、女大学という二つの対立した世界がある。この女大学に女丈夫アイダと女装した王子がそろう時、家父長制社会の、いわば、性の「日常」に対する性の「非日常」世界、いうなれば性の逆転した「さかさまの世界」ができる。<sup>(2)</sup> Natalie Davis が性の逆転について、「社会基盤を掘り崩すこともありうる」と述べたが、<sup>(3)</sup> それは女丈夫という概念が、価値の多面性に気づかせてくれるという認識からだった。その意味でアイダと王子の逆転した世界は、入れ子構造の外箱のまさに 'medley' である<sup>(4)</sup> ヴィクトリア朝社会の多様な価値を認識するために、大きな役割を果たしているのである。

以下本稿では、女大学という、性の逆転した世界の生成と崩壊の過程を追うことにより、その世界の構造を明らかにしたい、それは、女の高等教育という物語の具体的問題の背後に潜む、支配者・被支配者という社会の上下構造の実体を知る手がかりになるからであり、ひいては、内箱と外箱から成り立つこの『王女』全体のメッセージを読みとる鍵になると思われるからである。<sup>(5)</sup>

## I

王子の女装は、アイダの女大学に侵入するための唯一の手段だった。<sup>(6)</sup>彼の女装に代表される「身なりを変える」「装う」という衣服の着脱のイメージは、作品中しばしば表われ、詩のテーマと主要なかかわりを持っていると思われる。王子の女装行為を論ずる前に、まず女装を含めた「変装・仮装」行為の果たす一般的意味について整理しておきたい。

変装とは英語の disguise の語が示す通り、guise つまり appearance を奪う、剥ぐことである。いいかえれば「変装」とは偽りの外観に作り変えることである。しかしそれは同時に、変装した人間の行動やふるまいを変えることでもある。つまり変装することは、本来他者から期待されているものとは異なった役割を意識的に行うことであるといえよう。逆にいえば、役割は外観や行動によって決まり、衣服のごとく交換可能なものだということにもなる。実体とは異なり、一概念にすぎない役割というものが身分の上下関係を作り出していることを考えると、変装による役割の変化はこのような上下関係をひっくり返させることもできるのだ。変装が逆転を引き起こす可能性を持っているというわけである。

変装や仮装による身分・性の逆転は、基本的には復元性を持っている。例えば祝祭での仮装による身分・性の逆転を考えてみよう。<sup>(7)</sup>これは周囲に仮装行為の是認があり、仮装によって既成秩序を確認するという、一時的、遊戯的性質を持っている。従ってそこでは、仮装と元の姿との明確な区別があり、衣装を脱ぎ仮面をはずせば即座に元に戻るのである。この復元性は祝祭に限らず、身を隠すための変装でも同様である。

以上、変装・仮装の持つ一般的効果をのべてきたが次に具体的に王子の女装をみていこう。王子の女装はそもそもその思いつきが宮廷の祭の仮装体験からきたものだった。

A thought flashed through me which I clothed in act,  
 Remembering how we three presented Maid  
 Or Nymph, or Goddess, at high tide of feast,  
 In masque or pageant at my father's court. (I. 192-95) .

しかしここでの女装はあくまで女の聖域に認びこむ男の、唯一身を守る手段だったのだ。王子は一緒に侵入してきた友人、Florian と Cyril 共々懸命に女の役を演じる。

Make liquid treble of that bassoon, my throat,  
 Abase those eyes that ever loved to meet  
 Star-sisters answering under crescent brows;  
 Abate the stride, which speaks of man, and loose  
 A flying charm of blushed o'er this cheek. . . (II. 404-08) .

歩きぶりから声音まで、女の仕草を真似ようと努める三人の男のうち、王子だけは女装に加えて、彼の生まれつきのいわゆる「女性的気質」をもあわせて考えていかねばならないだろう。

王子は、冒頭から次のように自分自身を描写している。

A prince I was, blue-eyed, and fair in face,  
 Of temper amorous, as the first of May,  
 With lengths of yellow ringlet, like a girl. . . ? (I. 1-3) .

王子のこの女性性については、詩の中で随所に現われている。そのひとつは彼の父、老王に対する態度である。アイダの一方的な婚約破棄に怒り、戦争をも辞さない父に向かって彼は自分の反対意見を通しきれない。父への恐れは、アイダに会おうと城を抜け出す態度に顕著である。

Cat-footed through the town and half in dread  
 To hear my father's clamour at our backs  
 With Ho! ( I. 103-05) .

後になり、女装した王子がアイダに自分の恋心を第三者のふりをして伝える時、彼女も王子のこの女性的気質を指摘し侮蔑する。

'Poor boy, she said, 'can he not read—no books ?  
 Quoit, tennis, ball—no games ? nor deals in that  
 Which men delight in, martial exercise ?  
 To nurse a blind ideal like a girl,  
 Methinks he seems no better than a girl; ( III. 198-202) .

家父長制社会において、男性的・女性的というそれぞれの思考様式のパターンが定まってしまうと、女性的だと自他共に認める王子のような存在は、その世界からはみ出しとなる。そのはみ出しである王子が女装して女の役を演じる時、上に述べた一般の仮装・変装とは根本的な違いが認められる。一般の仮装・変装では日常世界での役割、つまり男なら「男性的」役割が一応肯定されているのに対し、王子の場合は変装する以前からすでに「女性的」であるというはみ出し者だったのである。従って、王子の変装がひとつの逆転した世界を引き起こす時、前者のように仮装を脱げば元通りという具合に、容易な復元性というものは考えられなくなっている。では、彼の女装により引き起こされる逆転した世界とはどんなものなのだろう。

## II

アイダも王子同様、日常世界ではみ出し的存在だった。彼女は男に服従せず、自分自身の意志を持ち、父 Gama 王を 'master' ( I. 145) し、'scare' ( I. 184) させる娘だった。この大学はもともと、南の国のガマ王が王子の住む北

の国との国境沿いに建てた、避暑用の宮殿だった。

A certain summer-palace which I have  
Hard by your father's frontier: ( I . 146-47) .

ここは、南の国にとっても北の国にとっても、「周辺」に位置するものであった。夏の宮殿が、アイダによって女大学に変わった時も、外界から隔離された辺境の女だけの空間だった。この女大学の空間的辺境性は、その世界での女の象徴的な辺境性を物語っている。両国の家父長制社会の性的秩序の中で、女は二義的、従属的存在として、辺境・周辺のなものとして扱われてきた。男の「中心」に対する女の「周辺」は、その世界の性的秩序を象徴しているのである。

ところが、王子がアイダを求めて侵入してきた時、その「周辺」が「中心」へと変わることになる。北と南のそれぞれ分離した視点からは存在しえないこの「周辺」の「中心」化は、両国が共通の視点、つまり、アイダの婚約破棄と王子の他国侵入という政治的問題を持つに至ってはじめて可能になる。

「周辺」に位置した女大学の「中心」化は、空間的レベルだけでなく象徴的レベルにおいてもおこっている。男勝りのアイダと女装した女性的王子がそうことによって、女大学は性的に逆転した「さかさまの世界」へと転じることになる。つまり、強い女と弱い男という男女の既存の役割の逆転が、象徴的には女の「中心」化、男の「周辺」化とみなすこともできるのである。女大学の外、老王やガマ王の世界にひとりの女の存在も言及されず、男しか住んでいないかのように描かれているのも男と女の空間的に対立した構図を強調することになる。

こうして性的逆転のおきた女大学は、外の世界の構造と具体的にどのように違っているのであろうか。まず老王に代表される父権社会に目を向けてみよう。ここでは主である男と従である女の役割分担が、次の老王の言葉にみられるようにはっきり定まっている。

Man for the field and woman for the hearth:  
 Man for the sword and for the needle she:  
 Man with the head and woman with the heart:  
 Man to command and woman to obey; (V. 437-40) .

常に受け身で主体性を持たない女の立場は、老王の 'Man is the hunter; woman is his game' (V. 147) という言葉に凝縮されている。男を中心とする秩序が、'the gray mare' (V. 441) によって万一破られれば、社会はたちまち混乱に陥る。そうならないために、アイダのようにまだ 'colt' (V. 445) であるうちに、'strongly groomed and straitly curbed' (V. 446) されなければならないというのが、外の日常世界の論理なのである。

片や女大学は、老王からみれば無秩序であり混乱そのものだった。しかしこの無秩序が女大学では秩序に逆転していく。'Household staff' (IV. 493) や 'live chattels' (IV. 494) でしかない従来の女たちは、'slaves at home and fools abroad' (IV. 500) であったのだ。アイダがめざした目標は、男と同等の地位を得ることだった。

... everywhere  
 Two heads in council, two beside the hearth,  
 Two in the tangled business of the world,  
 Two in the liberal offices of life,  
 Two plummets dropt, for one to sound the abyss  
 Of science, and the secrets of the mind: (II. 155-60) .

そのためには 'the habits of the slave, / The sins of emptiness, gossip and spite / And, slander' (II. 77-79) がなくなるまで知識を吸収せねばならない。「奴隸的習性」こそ秩序と称して女の役割を定めていたものだったからである。つまり、この習性 (habits) は外の世界で女たちがまとっていた古い衣装 (habits) であったわけだ。習性を捨てることは、衣服を脱ぐこととおなじで

ある。どちらも外から身につけるものであり、本質的なものではないのである。それが役割を決定しているなら、隷属的習性こそ脱ぎ捨てねばならない。結局女大学は、戦場に出て武器をとるという外の世界での男の役割、すなわち、主体的で支配的習性を身につけようとするアマゾネス社会を理想としているのである（Ⅱ. 110-11）。

さらにアイダは、従来女性的だと呼ばれていたこの習性を未教育の状態、未発達の子供の状態と同一視する。

... they had but been, she thought,  
As children; they must lose the child, assume .  
The woman: ( I. 135-37) .

アイダの「子供から脱却して、一人前の成長した女にならねばならない」という言葉は、女大学における女の目標を語っている。ところが彼女の言葉は、彼女の意図せざる意味をも含んでいるのである。「女となるには、子供を捨てねばならない」つまり、「子供を捨てる」という母性の否定が、一人前の女になるための手段だという撞着した意味にもとれるのである。<sup>(8)</sup>又さらに、'assume' が、「(服を) まとう・装う」の意味を持つことは、アイダにとって 'woman' は、実体ではなく、あくまでも交換可能な女の役割だったことを示している。彼女は「女」を役割としてみていたのである。

アイダの目標とする女とは、知性をみがき戦場に出て武器をとり統治するという、従来男のものとされていた役割を身につける「女」だったのである。しかし、'they must lose the child, assume the woman' の二重の意味は、女大学の理想と現実の断絶を暗示し、同時に、アイダ自身の葛藤となっていく。

### Ⅲ

外の日常世界の秩序こそ、アイダが槍玉にあげる対象だった。何故なら、外の硬直化した価値体系が、女を作られた役割に縛りつけ劣者の地位におとしめ

ているからだ。その秩序に反逆し、女たちを偏見と慣習のくびきから自由にするために創設したのが女大学であった。

ところが、そこで女たちが全く自由になったというわけではなかった。法・規範がひとたび定まれば、たちまち別の価値体系ができて上がり、秩序として硬直化していく。女たちはひとつの秩序の閉じ込めから解放されはしたが、逆転した世界の秩序に閉じ込められることになったのである。

アイダのめざす、唯一最大のゴールは、女を男と同等にするための知的向上だった。‘Man with the head and woman with the heart’と老王が女の属性とみなした‘heart’は‘head’に比べて劣っている、従って男のように女も知性を使わねばならない——。こう考えたアイダは、外の日常世界で女に割り当てられた属性をことごとく劣等なものとして退けた。

しかし大学内で女のあるべき姿としての役割が明確に定められれば、再びそこからはみ出し者が出てくるのは当然であろう。例えば、学問をして男たちから‘monster’（Ⅲ. 259）<sup>(9)</sup>と疎んじられるより、平凡な家庭生活を営みかかった盛りをすぎた女たちがため息をついている。

... murmured that their May  
Was passing: what was learning unto them ?  
They wished to marry; they could rule a house;  
Men hated learned women. . . (Ⅱ. 439-42) .

或いは“Tears, Idle Tears”と過去を追憶する唄を歌い涙を流す女がいる。‘Heart’で象徴される「女性性」を排除しようとした世界にそれをひそかに希求する女たちがいた。こういう女たちの存在は、女大学での理想的女概念と実体とのズレを如実に物語っているのである。

規制された制度からはみ出し者は、対立した制度の中で価値の相対性、反転性を容易に知る。日常からはみ出しが正当化され、日常の正当なものがはみ出し扱いを受けるという両面価値を知るのだ。王子は性的に逆転した女大学の中で、いち早くはみ出し者たちの存在を知った。そして、実体とアイダの理



想とする女のご概念との差異に気づいていくのだった。

これは同時に、王子自身の実体への開眼ともなっていく。わいせつな唄を歌うシリルへの殴打から始まった王子の「男」の暴露は、いろいろなレベルで現れている。川に落ちたアイダを救出するのもそのひとつである。続くホールにおける審問では、彼は「男」としての自分を強調する。

A man I came to see you:  
 . . . I hold  
 That it becomes no man to nurse despair,  
 But in the teeth of clenched antagonism  
 To follow the worthiest till he die: (IV. 421-46) .

「男性的」側面を暴露した王子は、追放され外の世界で女装を解くが、これが元の状態に戻り得ないことは前にも触れておいた。外から期待された「男」としての役割と、彼自身の持つ「女性的」なものとのズレが、今まで彼に「はみ出し」のレッテルを貼っていた。ところが今や彼は、変装では隠しきれない自分の実体を顕した。それは、押しつけられた役割ではない、自分の実体としての「男」の姿だったのだ。

外の世界では、男性優位の一面的価値観しか持たぬ老王が、以前同様、女を十把ひとからげで眺めている。

Man is the hunter; woman is his game:  
 The sleek and shining creatures of the chase,  
 We hunt them for the beauty of their skins; (V. 147-49) .

それに反発して、王子はひとつの概念だけにとらわれるべきではないと、価値の多様性を主張する。

. . . you clash them all in one,

Thet have many differences as we.  
 The violet varies from the lily as far  
 As oak from elm: one loves the soldier, one  
 The silken priest of peace, one this, one that. . . (V. 172-76) .

一方、アイダの場合は、実体と概念のズレは Blanche と Psyche の序列争いという、具体的な形で表面化する。<sup>(10)</sup>ブランチェは、'a fool' (Ⅲ. 67) と結婚したことを悔い男と対等になろうとして、女大学の計画、法を作った張本人であった。

The law your Highness did not make: 'twas I.  
 I had been wedded wife, I knew mankind,  
 And blocked them out; (VI. 306-08) .

彼女はアイダの右腕として、サイキより上位に立って大学での実権を握りたかったのだ。彼女の支配権への執着をシリルは見抜き、自分たちの女装を口外しないよう、裏取引をもちかける。

. . . I promise you  
 Some palace in our land, where you shall reign  
 The head and heart of all our fair-she-world,  
 And your great name flow on with broadening time  
 For ever. . . (Ⅲ. 145-49) .

この時、彼女の心は一時的とはいえ揺らぐのである。

ブランチェによる感化で、アイダは男と対等になるという教育の目標を、男に対する支配権へとすりかえてしまった。王子に指摘されるように、アイダは 'Fame for spouse and your great deeds / For issue' (Ⅲ. 226-27) を望む。そして彼女のペットである leopards のように男も飼い馴らせると豪語する (V.

390) ほど、女上位の願望となっていくのである。

それに対しサイキは、弟フローリアンをはじめ三人の女装を知りつつ、非情な大学の法を彼らに適用することができない。彼女のその情愛は、アイダのもとへ残した娘 Aglaia を求める時、頂点に達する。

... 'Mine—mine—not yours,  
It is not yours, but mine: give me the child',  
Ceased all on tremble: piteous was the cry:  
So stood the unhappy mother open-mouthed,  
And turned each face her way: wan was her cheek  
With hollow watch, her blooming mantle torn,  
Red grief and mother's hunger in her eye... (VI. 124-30) .

サイキの母性愛はアグレイアを必要とした。いいかえれば、サイキは子供なしには「女」になれないのだ。何故なら、母性こそ彼女の「女」を証するものであったからだ。彼女はアイダのかつての言葉、'they must lose the child, assume the woman' の二義的意味を、自らの行動で否定したのだった。子を想う母の愛がアイダの母性をもめざめさせた。いや、アイダはこの言葉を語ったあの時すでに、意識の奥底では、二重の意味とその矛盾に気づいていたのではないだろうか。その後彼女が幾度か「子供」を肯定的にも否定的にも、又、字義通りにも比喩的にも引き合いに出している<sup>(11)</sup>ことは、母性を否定しながらも、「子供」への関心を捨てきれないという、まさしく彼女の母性を立証しているのではないだろうか。

女大学がいよいよ崩壊の危機に直面した時には、アグレイアを 'Sole comfort of my dark hour' (VI. 177) だと思う程、アイダの母性愛ははっきり形をとって現れるようになっていた。そのアグレイアをサイキに手放す決心をしたのは、サイキの母性を自分を上まわるものと認めたからに他ならない。アグレイアの心の 'authentic mother' (V. 423) になろうとした彼女は、サイキとは逆に「子供 (アグレイア) を手放す」ことで、女の母性を表明したのだった。

こうしてブランチェとの決別、サイキとの和解は、女家長制の放棄、母性の容認というアイダの最終的選択を象徴的に物語っている。Nurse＝「看病する」が、nurse＝「授乳する」からの派生的意味であることを考えれば、アイダが馬上試合で傷ついた兵士への看護の申し出をしたことは、彼女の母性愛をはっきり裏づけているものだろう。さらにサイキとの和解を境にして、看護の申し出が味方だけでなく敵兵にまで広がっていくのだが、ここにアイダのより高次の母性愛、すなわち、博愛を見ることができよう。

女大学を病院として負傷者に解放することは、とりもなおさず男の侵入を許すことであり、外の日常世界を受け入れることであった。外の世界の侵入は、「さかさま世界」の崩壊を導くのである。

女性的なものをすべて排除し、男の役割をそっくり身につけようとしたアイダは、いわば王子と同じく仮装していたのである。しかし仮装はしょせん「仮」の衣装にすぎない。たとえ気質的にはみ出しであろうとも、王子が男でアイダが女であることは変わりようがないのだ。王子の看病（nurse）はアイダの母性的「女」を育てていく。そして王子が女装を解いて男に戻ったように、アイダもついに、偽りの自分を脱ぎ捨てる。

Her falser self slipt from her like a robe,  
And left her woman. . . (VI. 146-47) .

彼女の心のなかの母性という女の部分が、男と対等になりたいあまり、男を支配下におくという偽りの衣装の下に隠されていたのである。

Thee woman through the crust of iron moods  
That masked thee. . . (VII. 321-22) .

この時、女大学の「さかさま世界」という象徴的空間は完全に消滅する。あとに残るのは、はみ出し者として「さかさま体験」をし、それぞれ真の自分の実体に気づいたアイダと王子の理想的世界像であった。

男に「女性的」やさしさがあって悪いはずはないし、女に「男性的」知性があっても当然であろう。肝心なのは、男と女の性的分担、役割を範疇として押しつけるのではなく、双方の違いを認めつつ相手方の長所を自分に補足していくことなのである。王子は男が女の上位に立つという老王の考える世界も、男を女の支配下に置こうとする、以前のアイダの女大学も拒絶し、独自の男女関係から成り立つ世界を希求していく。

アイダの女大学に意味があるのは、「日常」の構造を反転させた「さかさま」の世界を作りだし、「日常」に潜む諸悪をみつめさせ、同時に「さかさま」でさえ制度化し価値が硬直化した時、同じ悪が生まれる危険性を示したことである。それに気づいたのははみ出し者である二人、王子とアイダだけだった。

#### IV

女大学の性の逆転が意味したことは、単に、さかさまの世界を日常世界に対峙させ、既存の社会構造を明確に映し出すためだけではなかった。それは同時に、「さかさま世界」の構造をも映し出そうとしたのである。この逆転の結果は、既存秩序の強化でもなければ革命でもなかった。むしろ価値の多面性を知り、よりよい男女の在り方、すなわち、'the crowning race of humankind' (VII. 279) に近づくための一歩だった。

だが、この逆転の意味は男女の関係の見直しだけにとどまらない。アダムとイブ以来<sup>(12)</sup>男女の上下関係は普遍的な社会の上下関係を象徴しうることから、この逆転のもたらす意味は、もっと広げて考える必要がある。つまり、Prologue や Conclusion という物語の額縁に描かれた、当時の、依然階級制度が残るヴィクトリア朝社会の状況も視野に入れなければ、この『王女』全体のメッセージを正確につかむことにはならないのである。

Prologue, Conclusion はヴィクトリア朝時代のある庭園が舞台になっている。一年に一度の Mechanics' Institute<sup>(13)</sup> の祭のために、Tory 党员、Sir Vivian が自分の庭を提供し、そこに近隣の労働者らが集まってきたのだった。庭園の一時的解放は労働者の特権階級への侵食を象徴しているものの、ここには依然と、

支配者と被支配者の伝統的階級制度が存在している。又その一方、庭では、電気回路、電報、ぜんまい仕掛けのエンジンなど、近代科学の実演による啓蒙が行われている。このように、過去志向の伝統と、未来志向の科学とが共存するヴィヴィアン庭園は、十九世紀中葉のヴィクトリア朝社会の縮図ともいえるのだ。多元的価値が共存するこの社会で、人々は従来の伝統的価値基準に安住している。中でも、特権階級の一人であるヴィヴィアンの息子 Walter は、イギリスの秩序だった現実を賛美する。

A nation yet, the rulers and the ruled –  
 Some sense of duty, something of a faith  
 Some reverence for the laws ourselves have made,  
 Some patient force to change them when we will,  
 Some civic manhood firm against the crowd – (Con. 53-57) .

そして、革命後のフランスとアイダの世界を結びつけて、その混乱ぶりを非難する。<sup>(14)</sup>

The gravest citizen seems to lose his head,  
 The king is scared, the soldier will not fight,  
 The little boys begin to shoot and stab,  
 A kingdom topples over with a shriek  
 Like an old woman, and down rolls the world  
 In mock heroics stranger than our own;  
 ...  
 Like our wild Princess with as wise a dream... (Con. 59-69) .

フランスは確かに秩序がひっくり返った。しかし、この逆転した世界こそアイダの女大学同様、元の世界の 'social wrong'(Con. 73) に気づかせてくれ、一元的価値観の修正をしてくれるのである。逆転した世界を 'the needful prelude to

the truth' (Con. 74) だと評価する、ウォルターの友人である語り手は、王子と同じく価値の多様性を認識したのだった。

彼は、成熟に向かう過渡期として現実社会を見、構成員たる人間の成長を期待する。彼の 'future man' (Con. 109) に寄せる期待とは、王子とアイダの物語から現実のヴィクトリア朝社会へとオーバーラップしていき、結局は十九世紀中葉を生きるテニスン自身の強い願望でもあったのだ。<sup>(15)</sup>

ファンタジー仕立てのこの物語が、二人の理想的結婚の暗示だけで終わることになったのも、又、女の教育の問題の解決をみないまま終わったのも、変革期の社会の多様な価値の側面をそのまま受け入れようとする、テニスン流の結論であったのかもしれない。女大学の性の逆転の構造を解明することは、『王女』と、その作品が反映しているところのヴィクトリア朝時代の構造をつかむことになる。それが又、その時代の読者の反響にこだわり続けた、詩人テニスンを理解するひとつの手がかりになるのだろう。<sup>(16)</sup>

※本稿は日本英文学会第59回大会（1987年5月24日、中央大学）に於いて口頭発表したものをもとにしている。

### 注

- (1) 本稿での Tennyson の作品の引用は、Christopher Ricks ed., *The Poems of Tennyson*, 2nd ed., 3 vols. (London: Longman, 1987) に拠る。
- (2) 「さかさま世界」の諸概念については、Barbara A. Babcock, ed., *The Reversible World: Symbolic Inversion in Art and Society* (Ithaca and London: Cornell UP, 1978); Christopher Hill, *The World Upside Down: Radical Ideas during the English Revolution* (New York: Viking, 1979); 山口昌男著『文化と両義性』（東京: 岩波, 1975）に負うところが多い。
- (3) Natalie Z. Davis, "Woman on Top: Symbolic Sexual Inversion and Political Disorder in Early Modern Europe," *The Reversible World* 154.
- (4) 作品の 'medley, 性については、今までにもしばしば指摘されているが、最近では Eileen Tess Johnston の "'This were a Medley" Tennyson's *The Princess*," *ELH* 51 (1984): 549-74が詳しい。
- (5) John Killham は、*Tennyson and The Princess: Reflections of an Age* (London: Athlone,

- 1958)において、作品と時代の関連、Tennysonの時代への関心を論じている。
- (6) 女大学の入口に、“Let no man enter in on pain death”と書かれている。*The Princess*, II. 178.
  - (7) Davis 163-66.
  - (8) *The Princess* のなかの「子供」の重要性についてはよく論じられているが、ここでは筆者の論点に関わるものだけ挙げる。Allan Danzig, “Tennyson’s *The Princess*: A Definition of Love,” *Victorian Poetry* 4 (1966): 83-89; Catherine Barnes Stevenson, “Tennyson’s “Mutability Canto”: Time, Memory, and Art” in *The Princess, Victorian Poetry* 13 (1975): 21-33; Robert Bernard Martin, *Tennyson: The Unquiet Heart* (London: Faber, 1983) 314.
  - (9) 学問とする女を ‘Woman as monster, とみることについて、Sandra M. Gilbert and Susan Gubar, *The Madwoman in the Attic* (New Haven and London: Yale UP, 1979) 参照。
  - (10) James D. Kissane, *Alfred Tennyson* (Boston: Twayne, 1970) 98. 彼は Blanche には *matrarchal inclination* を、Psyche には *maternal inclination* をみている。
  - (11) *The Princess* II. 44; 230-54; V. 419-27; VI. 175-90. ‘Child symbol’ については、James R. Kincaid, *Tennyson’s Major Poems: The Comic and Ironic Patterns* (New Haven and London: Yale UP, 1975) 70-47を参照。
  - (12) Genesis 2: 21-23.
  - (13) Mechanics’ Institute (Institution) とは多くの工業都市 (Manchester, Birmingham, etc.) に設立され、科学の啓蒙と労働者の娯楽を兼ねた組織である。ときには、科学の実演教示と娯楽の祭が近くの地主らの庭園を借りて催された。Killham 57-66.
  - (14) Walter と語り手とのフランス革命に関するこの数十行の会話は、1848年の二月革命の後書き加えられ、1850年に修正したものが再版された。
  - (15) 同じ時期に平行して書かれた、Epilogue. *In Memoriam*, 141-44参照。
  - (16) Tennyson が読者の反響にこだわり、版を重ねる度に修正したことは有名だが、*The Princess* は、とりわけその修正が多い。Ricks, 2: 185-86.